

平成 29 年 12 月 4 日

海洋会 東京支部 忘年会 講演 (レジュメ)

会員 岸本 宗久

## 舷灯余話

— 明治初期における舷灯製造と日本のガラス工業 —

はじめに

- 1 明治 3 年 (1870) 商船規則 「燈明ハ青赤白之三坐ヲ設ケ」  
舷灯設置の始まり 対象=商船 汽船・帆船の区別なし 構造・性能不明
- 2 明治 5 年 (1872) 船燈規則 1863 規則の日本語訳 対象=艦船  
汽船 (蒸気船) と帆船を区別 漁船は特定せず「甲板ナキ船」  
舷灯の色名が「青赤」から「緑紅」に変更・・・ “海洋” 903 号,904 号  
構造・性能不明のまま 条文・説明図とも難解 船灯製造急務だがガラス製造・加工の技術なし **資料①**
- 3 明治 6 年 (1873) 海軍省、船燈規則の改正建議 「船頭水主に分かり易く」  
同年、品川に「興業社」(ガラス製造工場設立) 主目的は西洋建築用板ガラス製造  
船灯用のガラス製造も急を要す (船灯表示は義務) ガラス製造技術はイギリスより  
船灯の場合、着色ガラスと灯窓ガラスの加工が困難 「三段折射平凸型透鏡」 船灯製作ままならず **資料③-1,2,3**  
※明治 9 年 (1876)、工部省買上げ、製作寮「品川ガラス製造所」、更に工作局へ移籍  
赤字垂れ流しのまま官営工場として続く
- 4 明治 7 年 (1874) 海上衝突予防規則 (明治 7 年規則) 日本の近代的予防法の嚆矢  
対象=「毎船」(汽船・帆船/商船・軍艦) 船灯設備基準なし 船灯そのものが不足  
条文・説明図とも相変わらず難解 **資料②③**
- 5 明治 8 年 (1875) 1 月 13 日、岩佐富太郎、左院へ建白 左院はこれを受けて海軍省に  
問合わせた。2 月 15 日、海軍省は、この意見は採用して実施を検討すべき旨回答 \*  
一方で海軍省は 人民が規則を知らないのは、地方官署の指導が十分でないからだ  
とし、内務省から各府県に通達を出して欲しい旨を太政官に上申 \*  
2 月 19 日、左院は岩佐に対し、船灯製造・販売についての具体案を提出するよう命じ  
たらしい。2 月 27 日、岩佐富太郎代理岩佐平四郎から左院へ答書が送られた。 \*  
こうして、「舷灯製造及び販売規則」の制定に至る (後述)  
3 月 内務省から各府県に規則遵守せよとの通達  
◎ 処理が速い 海難防止が喫緊の課題  
11 月 ※ 杉谷市兵衛のこと **資料⑤**
- 6 薩摩の色ガラスと舷灯  
「斉彬公史料」の「紅色瓦羅斯製鍊御開ノ事」(群馬大学図書館)には、明治 5 年 12 月

頃、船舶の舷灯に薩摩の色ガラスを用いることを命じられ、大いに儲けた旨の記載がある。但し、そこで製造された紅色ガラスの色調は殷紅色（赤黒く、紫っぽい色）で透明性に欠けているやに思われる。もし同資料の記載通りだとすれば、当時の舷灯製造に大いに貢献したはずである。しかし、同資料以外に薩摩ガラスが船舶の舷灯に採用されたことを記した資料は見当たらない。光達距離も十分でなく、強度も不足していてあまり普及しないまままで終わってしまったのではなかろうか。“海洋” 904 号

7 明治9年（1876）2月9日、海上衝突予防副則 対象＝日本形船

制定目的：日本形船の舷灯表示の徹底 船灯不表示船への罰金を設定 \*

実施日：明治10年1月1日

資料④

2月18日、内務省達、「舷灯製造及び販売規則」。3月2日、駅通頭の通達 \*

当時の舷灯製造事情：

ガラスは薄くて使えない ガラスは品川ガラス製造所で、灯体は国産の試み

※西村勝三（後述）によれば、西村が明治17年（1884）に工部省から品川ガラス製造所の貸下げ（翌18年払下げ）を受けた当時においても、まだまともな舷灯は出来ず、“工部省時代より製造していたもので満足なものは一つもなかった”という。その間は、もっぱらイギリスに注文していた。イギリス製は廉価で日本製では到底引き合わなかったらしい。

[7月20日、明治天皇東北・北海道巡幸、横浜ご安着]

8月27日、内務省から太政官へ海上衝突予防副則の実施延期を具申

9月13日、布告第116号にて 明治11年1月1日まで延期

8 明治10年（1877）7月、品川ガラス製造所一舷灯用ガラス製造工場竣工

11月、赤色ガラス製造 良好な製品は中々出来ず、赤字経営

9 明治18年（1885） 岩城硝子製造所、赤色ガラス完成

明治25年（1892）品川硝子会社解散 ※ 西村勝三のこと

日本のガラス工業の始まりは、明治40年（1907）に旭硝子が設立されてからだといわれる。その頃には、一般家庭にもガラスが利用されるようになっていた。根岸の病床の子規に「ガラス戸の外を飛びゆく胡蝶かな」の句が残されている（明治33年）。

結び

- ・ 船灯、特に舷灯の製造と日本のガラス工業の発展には、深い関係があった。
- ・ 開国後間もないころの日本には、自由闊達な雰囲気があった。
- ・ 国民には、独立国として、自国産業は自分たちで育てたいという気概があった。